「憧れ」と「目標」

古知野高等学校　梶浦 琥珀さん

スタッフルームから、フロアへ向かう母親のあとを私は小走りでついていく。賑やかなフロアに到着すると母の名前を呼ぶ声があちこちから聞こえる。たくさんの人が私の母と話したがっているようだ。母は一人ひとりの方に話しかけ、難しい表情をしている人にも声をかける。直前まで機嫌が悪そうな顔をしていたのに、段々と笑顔になっていくのが分かる。その母親の背中は華奢であるのにとても大きく見えた。そしてまぶしく輝いていた。

これが私の原点である。私はどうしたら母のようになれるのかと考えた時、同じ職種である義父に相談した。義父は有料老人ホームの施設長として現場で働きながらも職員の教育指導やメンタルケアなどを行っている。義父は誰よりも厳しく大変な介護の世界を知っていながらも、私の夢を止めることはなく、心から応援してくれた。

その後、私は両親の勧めで、介護福祉士の資格が取得できる古知野高校に入学し、介護に関する知識や技術を学び、日々実践している。そして様々な施設に介護実習に行き、経験を積んだ。実際に経験しなければ分からない大変さや苦悩を知り、改めて両親の偉大さを実感した。

尊敬する両親との暮らしは日々充実しており、それが私にとってこの先もずっと変わることのないものだと思っていた。

しかし高校一年生の冬、私の母は余命宣告された。ステージ 4 の肺癌。発見された時には既に骨にまで転移してしまっていた。私は一気に谷底まで落とされたような感覚を味わった。目の前は真っ暗闇で、頭もうまく機能せず、何も考えられなくなってしまった。憧れの存在である母がこの世からいなくなる。私の目指すべき姿が見えなくなった瞬間であった。

しかし、この闇から救ってくれたのも、他の誰でもない、母だったのだ。

ある日、母と癌の進行具合や今後について話していた時、「私はまだまだ死なないよ、全然生きるけどね。」と平然と母は言ったのである。母は強がっているという様子ではなく至ってそれが当たり前だという顔で言っていた。その言葉を聞いた途端、「あぁ、この人なら本当に生き続けることができるかもしれない。」と思った。これも長年、人の命と真摯に向きあってきた母の人間性の表れなのだ。

国立がんセンターがん対策情報センターの推計によると、一生涯のうちに何らかの癌になる確率は、男性 65.5％、女性 51.2％。つまり二人に一人の割合である。さらに死亡する確率は男性 26.2％、女性は 17.7％である。癌＝死ではないのだ。ステージ 4 と診断されても世界中に奇跡を起こしている人はたくさんいる。

「病は気から。」そんなことわざが昔から使われているが、気持ちで負けていては、そうなる現実しか起こらない。だからこそ私は、四月から大学に進学することにした。日本福祉大学の心理学科で、福祉という分野から人の心にどう関わっていくことができるのか、という事について深く学びたい。介護の専門知識や技術だけでなく、心のケアもでき、利用者様一人ひとりが笑顔で、そして「その人らしい人生」を、最期の一瞬まで過ごすためのサポートをする。そんな介護福祉士に私はなりたい。そしていつの日か、私は義父や母をこえる!!それが私の将来の夢であり、目標だ。